

## 子どもの「生きる力」の湧き出<sup>わ</sup>き出<sup>い</sup>ずるところを見据えて

戸田雅美

ある雨の日、三歳児クラスでは、子どもたちが降園前の準備をしていた。それぞれにトイレに行き、椅子を出して並べて座り、担任から手紙をもらってかばんにしまったりしていた。その間にも、トイレに行ったりついでにまた遊び始めてしまう子どもを誘いに行ったり、隣の席に座りたいと思っていた子どもが違う子どもと座ってしまったと、訴えに来る子どももありで、担任はそれぞれにいいねいに対応していた。その中で、ゆういちろうは、手紙を受け取ると、ふと思いついたように「手紙をこっちに入れよう！」と

つぶやいて、周りの子どもや担任の方を見る。きつと何か彼なりに思いついたに違いないと思つて私は見えていた。

この日、ゆういちろうは、朝からあれこれ思いついてやつてみては、そのことがトラブルのもとになってしまうというようなことが多かった。遊びの中で、子どもたちが列をつくって並んでいると、わざと別の列をつくって並び、「そっちの列から一人行ったら、こっちから一人って交代にやろう」という意味のことを提案しているらしいのだが、ほかの子どもたちに

は、わかってもらえず、順番のことでトラブルになったり、ヒーローごっこでは、飛び降りるために出してきた台をどんどん高くしようとして、担任に慌てて止められたりしていた。

私は、ゆういちろうのこうした動きを見ながら、「いけない」ということをやってみたくて、そのためにいろいろと知恵を働かせているのだろうか、それとも、たまたま彼がおもしろいと考えついたことが、ほかの子どもにとっては混乱のもとになってしまっているのか、と考えていた。担任も、ゆういちろうの思いつきのおもしろさは充分にわかってはいるものの、状況を考えると、つい「それはいけない」と止めてしまわずにはいられないようにも見えた。

手紙は……と見ると、ほかの子どもたちは、かばんの外側にあるポケット部分にたたんでしまっている。このポケットは、薄くて、折った紙がびったり入ることから、手紙を入れるようにデザインされているのがわかる。また、「手紙はここに入れるとくしゃくしゃ

にならないから、ここに入れてようね」と指導されているのだろう、ゆういちろう以外の子どもたちは、きちんとたたんで、手紙をこのポケットにしまおうとしていた。ゆういちろうも、すぐに自分の思うようにはせず、友達や担任を見ているところをみると、本当はこのポケットに入れなければならぬとわかってやっているのだろう。残念ながら、隣の子どもはその隣の子どもとふざけあって楽しそうにしている、ゆういちろうの目線には気づいてくれそうもないし、担任は、何か起こっているらしいトイレの方に出て行ってしまった。

ゆういちろうは、私に気づいて「手紙ここに入れてよ」と笑いながら、空になった弁当箱とコップなどが入っているかばんのメインの部分に手紙を押し込もうとする。私が「手紙はこっちゃんじゃないの？」とポケットの方を指さして聞くと、「そう」とあっさりうなずく。「でも、今日は雨がすごいから、ぬれないように入れるんだよ」とゆういちろう。確かに、かばんのポケットにはふたがなく、メインの部分はチャック

MAORI



がしまるようになっていいる。「そうか。大事なお手紙だものね」と私が答えるとゆういちろうは、ぱつと顔を輝かせて、「そう、おかあさんが見る大事なお手紙なんだ」と、とてもいいことを言う。

私が「そうだねえ。本当。でも、お弁当箱とかいっ

ばい入っているから、ぎゅうぎゅうづめになってきれいに入らないんじゃないのかしら」と心配すると、「大丈夫だよ」と請け合ってくれ、手紙をていねいに何回も折って小さくする。「ほらね!」とゆういちろうは満足そうに、きっちり折りたたまれた手紙を私に見せてくれる。「そうか。そうすれば、きれいに入るし、ぬれないね」と私が感心すると、ゆういちろうは、かばんのチャックを開け、真剣な表情でお弁当箱やコップのすき間に手紙を入れた。

子どもが考えつくことの中には、いけないことや大人が困ってしまうようなこともたくさんある。いけないことだと知りつつやってみたくなったり、思いついてしまったら、それはちよつとね……と止められてしまったなど、その動機はさまざまだ。しかし、大人にほんの少し余裕があつて、子どもの考えの筋道に付き合ってみることができるとき、子どもは案外そのことの中によい意味を見いだして、結果的にはおもしろい

展開が生まれることが多い。これは、私自身が保育をたくさん見てきた中での経験的な結論にすぎない。

しかし、子どもは、「一人の思慮深い人間の考え」として理解しようとすることによって、あるいは、「二人の間らしい楽しみ」として付き合ってもらえることによって、思いがけないほどに、一人前の人間らしい表情を見せてくれる。

たとえば、高く積んだ巧技台も、「どうやるの?」と言いながら、まずは保育者も一緒にやってみると、ほかの子どもがやるのを見て、少し高すぎるかもしれないと自分で低くしてみたりする。高くて危ない子どももいるかもしれないなどと気づいて、自分で考えて、マットを周りに持ってきたりするときもある。また、高さだけではない、まったく違う楽しみ方の工夫を思いついてやってみようとしたりする。先回りをして、「これでやってみようからやめよう」というかわりよりも、一緒にやってみながら、一緒に考えていくほうが、結果的に安全に遊べてしまうときも多い。

たかだか手紙の入れ方一つのことではあっても、子どもは子どもで、自分なりに考えていく。はじめは、ちよつといけないことをしたくなってしまっただけのこともかもしれないが、付き合ってもらうことで、その行為の結果を自分でも引き受けていこうとする思いが生まれる。その力をどう生かしていけるか。その子なりに自分の判断と責任で生きようとする力をどう引き出していけるか。保育の奥行きが問われる。

「安全」や「規範」といったキーワードがクローズアップされる、また、保育者としての説明責任を問われるなど、時代は、子どもを信じて任せてみる保育をすることを難しくするような方向性をもって動いている。その中であって、いや、そのような時代だからこそ、子どもが自分自身で育つ体験とその体験を大切にする保育のあり方を、見据えていきたいと思う。

(東京家政大学 家政学部 教授 児童学科 保育専攻)

\*この連載は、今回で終了いたします。